

## 忍耐と励ましの神

【聖書箇所】 15 章 1～13 節

### はじめに

●ローマ人への手紙 14 章、15 章は、教会においてキリスト者同士がどうあらねばならないかが教えられているところです。キリストを信じる人々の中には二種類の人々、つまり「信仰の弱い人、強い人」がいることを学びました。信仰生活には、信仰の本質的な問題にかかわることではなく、枝葉のこと、つまりイエスカノーで答えられない問題、たとえば、食べたり飲んだりする類い、日についてのこだわりなど、それらについては兄弟姉妹に対する深い配慮と愛をもった態度が必要であることを学びました。特に 15 章には、私たちがこれらのことによって互いに傷つけ合ってはならないだけでなく、むしろ互いに同じ思いを持つことによって、主の栄光が現わされるようにとの勧めがなされています。そのことを承知の上で、今回は少し違った観点から、つまり意図的にコンテクストを無視して、15 章を学んでみたいと思います。15 章には三つの「神」ということばが、以下のように出てきます。

- (1) 5 節の「忍耐と励ましの神」
- (2) 13 節の「望みの神」
- (3) 33 節の「平和の神」

●私たちキリスト者にとって、自分の信じている神がどのような方であるのかを知っていることはとても重要です。聖書は至るところで神を知ることの重要性を強調しています。たとえば、私たちはイエシュアを通して「永遠のいのち」を与えられましたが、その永遠のいのちとは何でしょうか。ヨハネの福音書 17 章 3 節によれば、「永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神である御父と、御父が遣わされた御子とを知ることである」としています。神を知ること、それは御父と御子を知ること、あるいは御父と御子とのかかわりを知ることが重要です。なぜなら、私たちはそのかかわりの中に招かれているからです。

●旧約のホセア書で、神は預言者ホセアを通して「わたしは・・・全焼のいけにえより、むしろ神を知ることが喜び」と述べています。私たちが神をどのようなお方として知るのが、それは他の何にもまさって大切なことであり、大きな喜びと感激と満足をもたらします。ですから、「主を知ることが追いつめ」続けたいと思います。詩篇の作者も「御名を知る者はあなたにより頼みます」(9:10)と告白しています。神を知ることが、神を信頼するために必要な前提条件なのです。そこで今回は、ローマ人への手紙 15 章に記されているパウロが信じる神について、二回に分けて取り上げていきたいと思っています。今回はその第一回目です。

### 1. 忍耐と励ましの神

●5 節で「忍耐と励ましの神」とあります。口語訳聖書では「忍耐と慰めとの神」と訳されています。これは神ご自身が忍耐と励ましの神であることを強調しています。また同時に、神が私たちに忍耐と励ましを与えることのできる神であるという意味でもあります。私たちの神はどの程度忍耐深いのでしょうか。もし神が気の短い方であったなら、私たちはとっくに滅びていたことでしょうか。神は私たちに対して忍耐深くあられる方であって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。「主の忍耐は救いであると考えなさい」と使徒ペテロは手紙の中で記しています(Ⅱペテロ 3:15)。

●ペテロ自身もイエシュアからどんなに忍耐をもって扱われたことでしょうか。ペテロ自身がそのことをよく知っていました。ひとりのキリスト者が神の本当の愛と恵みに目覚め、霊的な大人として成長するそのプロセスには、神だけでなく、多くの主にある兄弟姉妹の愛に基づく忍耐があったことを忘れてはなりません。忍耐をもって私たちの罪が赦されてきたことを忘れてはならないのです。また私たちがキリストのからだである教会を建て上げていくそのプロセスにおいても求められるのは「忍耐」なのです。

●相撲の世界で、力士たちがよく口にすることばに「辛抱」という言葉があります。苦しい稽古に耐えることによって、出世への道が開かれることを彼らはよく知っているからです。今の世代は、耐えること、忍耐することに慣れていないと言われます。今の世代は、意識して、忍耐の必要な環境から遠ざかり、明るく、楽しく、軽く生きることを求めています。今は、ヤコブ書に記されているような「信仰がためされると忍耐が生じるということ、あなたがたは知っている。その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります」という世界とはほど遠い時代です。しかし、私たちの思いとは裏腹に、忍耐せざるを得ないことが何と多くやってくるのでしょうか。現実には、私たちが望んでいることとは必ずしも一致しません。むしろ、理解に苦しむ事柄に多く遭遇します。しかしそのような時、忍耐を支えるのは神の励ましなのです。

●「欲しがりません。勝つまでは」という戦時中のことばを聞いたことがあるでしょう。我慢を強いられた時代がありました。しかし聖書のいう忍耐とは、単なる我慢とは違います。どう違うのかといえば、「堪忍袋の緒が切れて」ということばがあるように、我慢がどこかで爆発してつぶやきや泣き言、愚痴、恨み言が出てくるものです。しかし聖書のいう忍耐は、どんなにまずいと思える状況の中にも神の御手があることを認め、今はトンネルの中を通過しているけれども、神は下手なことはなさらない、その中に置きっ放しになさる方ではない。必ず、出口を備えていてくださる方であると信じて耐えるのが忍耐なのです。ですから、単なる我慢ではないのです。

●「忍耐」ということばのギリシア語は「自分の置かれた立場、場に固く踏みとどまる」という意味があるそうです。忍耐というと一般には受け身的なイメージですが、むしろ積極的・能動的な意味があるのです。つまり、それは自分の置かれた場で、たとえそれがある種の淋しさや苦痛、悲しみを伴うことであっても、しっかりとその場に踏みとどまって自分の務めを果たしていくこと、これが聖書のいう忍耐なのです。ローマ書 15 章 4 節に「昔書かれたものは、すべて私たちを教えるために書かれたのです。それは、

聖書の与える忍耐と励ましによって、希望を持たせるためなのです。」とあります。「昔書かれたもの」とは旧約聖書の事です。そこには忍耐を全うさせるための神の励ましや慰めの記事に満ちているということです。私たちはしばしば人やモノに慰めを求めがちです。しかし絶対に裏切らないと信じた親友や仲間や兄弟から、何度冷たいことばを聞かされたことでしょうか。私たちが忍ばなければならない出来事の中で、励ましの神がおられるのです。そんな話の例として、ヨセフの物語を思い起こしてほしいのです。

## 2. ヨセフの生涯に見る忍耐と神の励まし

●みなさんはヨセフの物語を知っていると思います。簡単にそのストーリーをお話したいと思います。ヨセフは父ヤコブから特別な寵愛を受けました。他の兄弟たちと着る服から違っていたため、兄弟たちから反感を買いました。さらなる反感を買ったのは、ヨセフが見た夢でした。その夢とは、ヨセフが12人の中の11番目であったにもかかわらず、ヨセフが他の兄弟たちよりも上に立つという内容であったために、兄たちの怒りを買い、その結果、ヨセフはエジプトに奴隷として売られていくことになりました。ヨセフが見た夢とは全く反対の出来事でした。しかし実はそこに人知をはるかに越えた神のご計画があったのです。そのご計画はだれにも分かりませんでした。

●ヨセフはエジプトでポティファルという家で忠実に働き、それが主人に認められて、好意を得ることができました。そのことでヨセフはその家の財産の管理をすべて任されたのです。けれどもヨセフはその後、その主人の妻の誘惑を受けることになります。しかしヨセフは神を信じる者としてその誘惑をきっぱりと拒否したことで、それを恨んだ主人の妻によって濡れ衣を着せられ、ヨセフは一転して投獄の身となってしまいました。

●やがてそこでパロによって投獄された二人と出会います。彼らは牢獄の中で夢を見るのですが、その夢をヨセフは解き明かします。そしてその解き明かしのとおりになってしまいます。さらに2年の歳月が流れ、今度はパロが夢を見ます。その夢を解き明かすことのできる者たちがいなかったために、ようやくヨセフは表舞台に登場するのです。そしてパロの夢を解き明かしたことで、エジプトが飢饉の危機から救われたのです。そのことによって、ヨセフはエジプトの政治をつかさどる重要な地位に就くことになったのです。そしてそれだけでなく、かつて夢で見たように、カナンにいた自分の兄弟たちを飢饉から救うことにもなったのです。

●ヨセフの生涯を読んでいく時、繰り返し、繰り返し出てくる言葉があります。それは「主がヨセフとともにおられた」ということばです。主がともにおられたことが彼の祝福された鍵でした。その意味ではヨセフは「幸いな人」であったと言えます。しかし「幸いな人」が逆境や困難、試練に遭わないということにはならないということです。ヨセフの生涯を見ると、どうしてそんな困難な中を通らされるのかという疑問が湧いてきます。それは神への疑い、不信につながりかねないものでした。しかしヨセフは自分に示された夢を信じ続けたのです。試練や困難にあうことで、その人の信仰は試され、神に対する信仰が本物

であるかどうか明らかにされるのです。

●ヨセフの生涯が示すように、ただ耐える以外に道がないことがあります。暗やみが覆い、希望の光が見えない時、必要なのは「忍耐」です。一日の中で最も暗い時はいつでしょうか。それは夜明け前です。

【新改訳改訂第3版】 I コリント書 10章 13 節

あなたがたの会った試練はみな人の知らないものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを、耐えられないほどの試練に合わせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えてくださいます。

●神は真実な方です。私たちが会おう試練は、私たちの耐えることのできる範囲内でのことだとみこばは教えています。試練には必ず終わりがあるということです。このことを受け入れることができる人は幸いです。ヨセフが困難の中で忍耐をもって耐えることができたのは何によってであったかをもう一度考えてみましょう。これは非常に重要なポイントです。

●まず、ヨセフは神のご計画の全体を知っていたでしょうか。彼が分かっていたことは、夢を通して知らされたように、自分の生涯は神のご計画の中に組み込まれているという信仰でした。彼のすべてきことは、神の主権を認め、「神の力強い御手の下にへりくだる」( I ペテロ 5:6)ことでした。彼の忍耐は意志が強いとか弱いといった性格の問題ではまったくありません。「信じているのにどうして」という構えではなく、信じていても試練や困難はやって来るものだとして受けてとめていたのです。おそらく、「主がともにいてくださった」ことでそうした構えを持つことができたのだと思います。この主が私たちに「忍耐と励ましを与えるお方である」ことをしっかりと心に留めたいと思います。最後に、ヨセフの生涯の圧巻とされる箇所を見ておきたいと思います。

【新改訳改訂第3版】 創世紀 50章 19～21 節

19 ヨセフは彼らに言った。「恐れることはありません。どうして、私が神の代わりでしょうか。

20 あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました。

それはきょうのようにして、多くの人々を生かしておくためでした。

21 ですから、もう恐れることはありません。私は、あなたがたや、あなたがたの子どもたちを養いましょう。」

こうして彼は彼らを慰め、優しく語りかけた。

●かつてヨセフは兄弟たちの悪(悪だくみ)によって傷つけられ、エジプトの地に連れて行かれる身となったのでした。事実、彼の兄弟たちはまさにヨセフに対して「悪」を計ったのです。ところが神は、それを**良いことのための計らいとなさった**のです。神の計らいとは、神のご計画です。そのご計画の実現のために、ヨセフの生涯があったのです。ヨセフが兄弟たちに語ったことばは、味わえば味わうほど、実に深い意味をもっています。

1995.7.16